




 刀筆青砥石文
 四

^ 13
 3036
 4



門へ 13
號 3036
卷 4

布指

刀筆青砥石文鸞水箴語卷之四



江隱

曲亭主人筆削

洛客

操亭琴魚原稿

第七套

歸京の音耗

假梁の水聲

賢女の賢者は帰や。ことと良縁との佳人の才子は適や。これを奇耦との淫婦の奸
夫は遇ふや。ことと野合との賢女と賢者と佳人と才子と尤偶と。ことと凡その類
少きの故に淫婦と奸夫と最押易いと。同氣相求るの故より賢妻多れば樂て
淫せばその良人不肖者多ればその負れと見て悦ばず。淫婦は笑をり人を迎ふ淫
あふれば樂まば。江湖億万の人数と好も淫を貪るもの稀と云ひて。淫婦は数まよ

青砥石文鸞水箴語卷之四

富^と賢^{けん}文^{ぶん}一^{いち}夫^{ふう}一^{いち}造^{ぞう}化^かの^て手^てより^も水^{みづ}漏^もて^こま^の不^ぶ理^り奚^あを^まも^の國^{くに}を^傾け^家を^覆す^の十^{じゅう}や^て八^{はち}九^くこれ^を知^らず^て溺^{おぼ}す^のの^愚知^らず^の去^きる^のの^迷ひ^こ只^{ただ}聖^{せい}賢^{けん}の^まを^大約^{やく}治^ちを^貪ん^と欲^ほす^のの^衣裳^{しやう}結^{むす}髪^{かみ}動^{うご}静^{しず}云^い為^な用^{もち}心^{こころ}を^偽飾^{いつはり}て^女子^{むすめ}の^悦を^迎ふ^の且^{かつ}婦^{むすめ}人^{ひと}の^情の^巧言^{こうげん}令^{しん}色^{しき}を^なら^ば賢^{けん}と^せば^この^浮薄^{うはく}便^{べん}佞^{ねい}の^艶治^{えんち}郎^{らう}へ^まふ^て數^{かず}妻^{さい}を^富り^偽飾^{いつはり}す^所餘^{あま}木^きの^湯治^{たう}劇^{げき}齋^{さい}亦^{また}の^人之^{ひと}彼^かを^見て^疎む^のの^此を^見て^親人^{しんじん}の^態見^{けん}て^態直^{ちか}せ^のの^格言^{かくげん}を^忘る^のの^彼山^{さん}鷄^{けい}の^まは^惚て^おの^まは^溺る^類も^べ再^{さい}說^{せつ}草^{そう}索^{さく}偽^{いつはり}二^に郎^{らう}へ^膽太^たくも^留守^{りゅうしゅ}の^家を^踏荒^{あらい}て^阿磔^{あつぱく}と^樂を取^とる^程は^けん^と明^{あき}と^明して^光陰^{こういん}の^過を^覺せ^秋也^{あき}也^{あき}九月^{くわがつ}の^後の^月は^なら^ばな^らず^けも^亦阿^あ磔^{つぱく}と^共酒^{しゆ}を^啜て^程は^外の^まへ^く

呼^よ門^{もん}の^{あり}是^{こゝ}立^た出^でて^由を^問は^る人^{ひと}答^{こた}へ^のは^六波^は羅^ら殿^{でん}の^下の^守屋^{しゆゐ}あり^のの^多る^西國^{せいこく}より^劇齋^{げさい}老^{らう}の^信あり^の書^{しよ}状^{じやう}魚^{ぎよ}の^如此^{ごと}傳^たへ^とむ^り又^{また}状^{じやう}と^流す^て走^ま去^りり^是の^名を^劇齋^{げさい}の^劇の^字を^聞く^と忽^{たち}地^ぢ胸^{むね}を^騒ぐ^遠く^奥へ^いち^て云^いふ^と告^つぐ^はる^阿磔^{あつぱく}の^書状^{じやう}を^手に^取る^がら^偽三^{さん}郎^{らう}と^目を^あへ^て俱^{とも}は^嘆息^{たんそく}を^外に^見し^て阿^あ磔^{あつぱく}が^いふ^主人^{しゆじん}の^西へ^赴た^六月^{むつき}の^下幹^{かん}を^死假^{かり}漆^{しやく}を^今の^日に^送る^に七^{しち}十^{じゅう}日^{にち}は^あり^ぬま^は歸^{かへ}京^{きやう}の^報あり^とも^なを^なら^ぬと^いふ^と俱^{とも}は^月日^{げつにち}を^送る^にと^いふ^のの^別の^程も^あら^ずに^いふ^とら^ば數^{かず}け^偽三^{さん}郎^{らう}と^いふ^を慰^{なぐさ}め^るに^豫より^期を^先の^状を^見る^とい^ふに^封箴^{ふうしん}を^折る^共侶^{どうり}と^いふ^を見^るに^初の^守の^安否^{やすひ}を^訊ふ^恙も^なし^とい^ふに^其の^次の^條は^云七^{しち}月^{げつ}某^{なつか}の^日に^い

太宰府に参着して探題の尊恙を拜診し、躬て湯劑を調進せし。三日ふりて效驗あり。五日ふりて浮腫過半瘦退。七日ふりて水氣全くあり。二七夜ふりて元氣本復まのひ。之七日ふりて氣力快然とて生平より健ふるをせり。日かその功を奏するとの速るをちん飲びのあま。過分の俸禄をりて、給中の醫官ふせらるべしと懇い仰下されども。固く辞奉るふ。そのより許されざる。海田をせり。旨の饗饋は日と強くて。ややくは身の暇をまつ。禄物引とり。よろて明曉發足とがれば。後の月見の比。必歸京とべし。さる候不樂く。徒然と堪らけん。今要時の程あれば。日を俵て候へ。と多く。鴻便をりて。案内をめでたく。かくとて書りける。阿磔の書状を卷も返さ。引東ね推換りて。腹たげ。撲地と投捨徒然らん。

日を俵て。待と書き。疎く。さ。そのひ。せん。と。さ。う。に。袖。り。て。涙。を。推。拭。へ。偽。郎。且。く。沈。吟。し。て。け。ひ。九。月。十。三。日。その。状。の。趣。へ。歸。京。け。り。翌。日。人。處。を。と。て。居。か。り。さ。る。い。さ。る。歎。き。の。ひ。そ。これ。の。比。蓮。華。院。に。を。り。て。寄。宿。せ。り。又。觀。音。籤。を。拈。り。て。吉凶。を。問。奉。り。一。第。二。籤。を。取。得。り。か。て。その。靈。籤。の。詩。の。蔽。衣。云。云。と。い。ふ。絶。句。あり。後。は。考。合。され。ば。只。衣。を。破。ら。れ。て。ち。ん。牙。は。あ。へ。ま。祥。あり。け。り。ん。や。又。その。結。句。は。臨。水。云。云。あり。遭。磁。云。云。と。水。も。漏。れ。り。と。石。より。も。臥。死。契。り。を。示。さ。せ。り。加。旃。鞞。を。包。み。紙。巾。も。靈。歌。頭。と。し。ん。べ。今。こ。そ。要。時。別。々。も。後。を。必。へ。歎。く。は。足。を。又。この。曉。と。い。れ。い。と。奇。に。夢。を。入。り。壁。に。被。録。倉。を。以。て。鐵。觀。音。堂。と。し。ん。牙。と。し。ん。と。臥。し。り。と。ん。と。は。彼。首。觀。音。の。面。影。と。い。れ。り。月。て。

俗髪ざんぱつのいと怪あやしくも程ほどは彼崩かたむらする佛ほとけの軀みづらのつゞ聚あつりつ。その首くび願ねがむ亦またあづから。軀みづらは著つて忽たち地ぢは五體具足ごたいぐそくの為ため体てい一個いっごうの男子なんしと頭かぶする形かたちは消くて水みづはありぬ覚さてこのるぬぬかへとも。かひひる後のちは快こころかた。今いま又またもも亦また夢ゆめをわさるべし。首くびと軀みづらと離わかれ下くだ佛像ぶつぞうの面影おもかげのこれこれは月つきて五體ごたい全ぜんくありあひハ。今いまの別わかれをなすめども。後のちをよむ情縁じやうえん竭つきむ。夫おとことあり婦つまとあり。おん身みとこれこれの前まへ象さうありん。後のちは消くて水みづはありハ。今いまの煩惱ぼんぷうをかた流ながし七しち飲いんびを迎むかふ祥欣さうきんおん身みのいふ。おひのみと問とまて。雲うみ時頭ときづかを傾かたけいと淡々たんたんした女子むすめの智ちをりて鮮あざむべし。のあなねども。おん身みの判断けんぱんいと愛あさ。夫婦ふうふハ一體いつたい分身ぶんしんとあり。のあなねのあなね。下くだ佛像ぶつぞう。全ぜんくありせのふと。正夢せいむありて吉祥きしやうあり。下くだあなねの。根ねをたれたる男おとこは

癖くせは且かつくあなとある。わらふよまな花はなのいぞ来きもせん契ちがり。この偽いつはりるべの識しを遺のこす。のう。この人を偽いつはり二に郎聞らうもんあはさる。疑うたがひハ人ひとはよるべし。生涯せうが妻つまあり。子こありて。おん身みを忘わすれて戯あそむ。他ほかハ女子むすめをんかへんや。さるる母はは疑うたがひあり。千枚ちひらの誓ちか紙しを贈くるとも。厭いとふべし。あなねども。既すでに山やま鷄とりの片かた靴くつハおん身みが護符まもり囊ふくろはあり。おん身みが濁水じやくみづの鏡かがみハ。おん身みが腋わき刀やいばの靴くつはあり。刀やいばハ男子なんしの魂たまを護まもり。守まもるの神かみハ百枚ひゃくまい千枚せんまいの誓ちか紙しとあり。この両ふた種しゆはまゐりのあなねや。おん身みが他ほか女子むすめはあり。おん身みが双ふたよりて臂うでをさへん。おん身みが秋風あきかぜはあり。守護しゆごの神かみハ踢か殺ころせん。神通しんつう起おす。請ねがふ誓ちか紙しはあり。阿磔あせきハあり。胸むねはあり。皮膚かわはあり。著つる護符まもり囊ふくろを引出ひきだして推お披ひき。現いま山やま鷄とりの靴くつはあり。おん身みが恋こひはあり。慰なぐさめはあり。おん身みが

かぶ頭下。歌さへあつた。といひつ。巾。色紙を披きてん。ふ彼虫の糞の歌。失て舊の
 白紙のつけま。いひつ。巾。且驚き且怪し。不疑惑。忙然。偽二郎。この
 る紙。と怪し。と六也へ。阿磔を。勿ん為。此由。屈せ。荒介。とら。笑筆。とめて
 書。る物。の消。も失。る。怪。と。虫。の糞。や。て。あ。の。づ。ら。文字。と。さ。る。の。あ。る。ふ。
 日。さ。ら。筆。さ。れ。び。滅。さ。ん。や。さ。ら。ま。か。ひ。ひ。そ。彼。歌。の。こ。れ。記。臆。う。書。つ。け。く
 ま。わ。せ。ん。とい。ふ。阿。磔。の。疑。ひ。解。て。岩。齧。棚。の。辺。る。硯。箱。と。さ。ら。う。つ。墨。搦。流
 して。さ。ら。よ。と。れ。ば。その。間。は。偽。二。郎。の。包。紙。を。推。定。して。硯。は。む。ひ。筆。を。洗。め。蔽。衣。又
 莫。綴。漆。著。欲。相。縁。臨。水。不。可。濯。遭。砥。初。究。研。山。さ。の。の。ち。ら。り。け。お
 ぞ。ら。り。邨。濁。り。ま。ず。水。か。ま。り。て。為。人。書。と。落。疑。せ。の。偽。二。郎。の。偽。と。分。て。こ。

詩。六。点。を。加。且。備。訓。して。あ。の。意。を。り。て。和。解。せ。り。お。詳。し。と。示。し。靈。載。の。詩。
 い。歌。と。い。ひ。れ。と。お。ん。身。と。さ。ら。も。契。る。前。象。あ。る。べ。さ。の。あ。れ。今。又。その。詩。を。添
 たる。努。秘。一。の。と。密。詰。の。阿。磔。の。と。飲。げ。お。さ。ら。く。讀。誦。して。護。符。囊
 納。め。け。り。抄。秋。ま。れ。日。の。短。く。て。ま。の。の。み。時。も。移。り。つ。偽。二。郎。の。外。を。見
 か。へ。て。縁。頼。の。紙。障。よ。全。く。日。影。の。落。え。ば。け。よ。早。未。の。過。さ。今。も。あ。れ
 お。の。の。選。べ。い。つ。て。脱。る。べ。き。よ。且。く。別。る。と。も。後。あ。ひ。か。と。ら。ま。あ。ら。べ。
 お。ん。身。術。よ。く。こ。ら。へ。て。さ。く。と。派。辞。去。る。不。覺。は。物。を。さ。ら。と。て。氣。色。を。悟。れ
 め。ひ。そ。と。さ。ら。と。恥。て。立。ん。と。さ。ら。と。遠。く。引。さ。め。案。内。の。状。の。著。う。と。さ。け。の。必。し。と
 り。も。あ。ら。び。尚。い。ひ。漏。せ。る。も。あ。り。あ。ど。て。や。さ。ら。と。急。心。つ。よ。と。怨。ま。れ。ど。

近く出て入るに宿屋へこそ西國より。目今かへるに高き名告りけり。面
 貌の日黒く。衣裳脚絆は蹴揚の泥の乾張著て塵埃染る。長途の
 疲勞を物ともせど鞍の駄荷を運入と。馬奴人夫亦と勞めて。六月以來
 出でやう。草鞋解捨母屋より。阿婆がより不跪坐を苟まが。六月以來
 ちん身は恙ものなれど。飲びこまよるのみ。大先生も社健全を伏見
 ちで著せむひぬ。僕に駄荷どもの宰領して先へいれて。どこの下を告ると
 宜と。懇もゆるぎ。歩のそくして還り。先生は六波羅殿へおん礼をまうして
 こそ。帰宅と。げと。宜ひつと。やくも黄昏時よる。心まづか。待せ
 めといへ。阿婆の微笑く。長き旅宿は恙も。家公のかへる。と聞て。ハ

いと軟く。力つた。和殿もさる。疲勞けん案内の状のけし。著る。些の儲を
 せんとか。早の。人手小乏。異社の姨と傭んと。匙を袖木挽坊へ走
 た。洗足の湯も温。便も。いひて立んと。洗
 裳と。引。喃阿婆。去歳の冬より。ひと。と胸は
 の。焦。果。第一の權。厭。心法。便。ひ。胸。焦
 の。第二。匙。且藏。睜眼。鼻。嘔氣。出。此度の
 留守。残。ひ。先生。如。守。猫
 置。顔。別。日。七。五。日。初物。之
 折。下。入。生。延。口。説。果。目。細。抱。著。と。

處を天窓を破と打驚して怯む矢突退け声とあり立よの無禮之醉狂飲
 吾侪への正妻を頼と家の守り任用されて内外の守をまゐりの日南
 臭く深垂し和殿をどぐ不義せんや戲も事まどとる以後を借と慎むその
 なびの家公を告ん吾侪と恨まふる。こゝの外の外よひ懲らされても此も強ど冷を
 原來の身情由もあつたの衣領に附る飲原この家の富饒ふりし入
 鎌倉不和の兄ありその嶋影屋湯治と呼ぶ。一時豪家ありとぞその
 兄貴の宗よりて狂乱と經死と。送る入野の財の承嗣へと子どものあり。
 不和の身でと身多れば指も滞るに数百の金と流し入せ主人の未歴究々
 秘密のふまればおん身はしるぞ知らぬ。原まらうき金もれば大後つるあべと



帰京を報て
 蜜八
 阿磔を挑む

阿磔

紀の藤白の人といふ。されば負ハ輪有。今影もあは僕でも。さるる乃運
 ろくばやハ靡さるひね物撥獲少く。共侶は東國へ走らんや。よ喃々と口説
 ようて又負縁人とする折々。人の来る音にてけしハ駭忙てえかへる間ハ阿磔ハ
 奥へ外してり。蜜ハ偶然の便宜事。の成されハ腹立げ。咳き途をわさ
 迎んとて草鞋と穿て出る程。是ハ異社を伴ひて。杉木挽坊よりかへ。遭ぬ當下
 此彼門辺よ立て恙多を祝。祝され馳て内外へ別まけり。されハ異社ハこの月来より
 苗守を訪ひし。是ハ親も由断せ。その来る影をみる毎も。名く偽二郎を隠せ
 久異社ハ件の密事を洩さ。稍肌寒く。隨ハ鮮洗衣。暇ありてこの月ハ
 訪さる。小あつ。の帰京のよ。灰ゆて。馳て是とも来つ。阿磔ハ對面しく賀を

述又その二病をひて。是共侶ハ火を焼水。を汲入。とて庖厨の吏を資り。さる程ハ
 阿磔ハ嚮ハ密入が。れハ調戲。問どか。うら。驚けども色ハ出さ。だ。
 そが。奥ハ退き。心ゆく樂ま。づ。と。あ。ひ。や。このあつ。ハ
 鎌倉ハ在り。と。た。苟且も。夫。小。せ。湯治。が。身。あ。ん。と。ハ。そ。今。ま。でも。知
 ざ。ハ。中。に。病。多。り。一。兄。同胞。あ。ん。ハ。生。日。送。ハ。音。耗。せ。ど。況。その。兄。身。あ。り。そ。ハ
 噂。も。せ。る。ふ。よ。れ。り。人。身。か。ま。い。る。あ。ん。ハ。名。あ。ど。も。快。ら。ぬ。湯。治。が。弟。の。家。ハ
 来て。側室。あ。り。ふ。け。ん。然。る。も。既。ハ。傳。二。郎。ぬ。と。契。初。て。ハ。疎。した。今。又。寛。家。乃
 弟。ぞ。と。受。て。ハ。い。そ。う。堪。る。べ。き。と。ハ。思。へ。ど。彼。人。と。い。ま。謀。合。さ。ぬ。ハ。逃。隠。る。べ。き
 蔭。も。み。速。く。ハ。緯。と。為。損。せん。才。と。任。せ。も。心。と。任。せ。ば。思。ふ。う。一。も。堪。忍。び。て。日。を

累祿月も立六。その間、彼人又告て智と借り。由断と窺ひ脱る術のあらうと
 やうとどひかへつ。悪業の報酬と煩惱の胸の火焰の火車ゆゑ。心の鬼へこれ
 かゝる。冥土の迎近つたぬ。とある。悟らぬぞ無慙る。かくてその黄昏は劇齋の
 密八木野の従者は送下まで。富小路の宿所をかへつ。六波羅より隸人ホハ
 皆そが休は辞し去りぬ。日ごろ疎き四鄰の人。帰寧の祝義は詰来るものも
 少か。阿磔の準備の不並と劇齋は勸めつ。憂と隠してと奥へ。家内熱鬧く
 燈火の花も数す。て蕭然あり。留守の宿の。そのままで夫似さう。これ劇齋が
 療治効験の自負物。うへへばさう。西國の名所舊迹。或は道中の異聞珍説は
 衆皆奥と催と程は長。秋の夜更闌し。異社のものが宿所へ退つ。わいも

客のさらして。就て臥房は入り。ふけり。人木石はあふ。せん。轎子は昇までも。いこ
 長途は疲勞さうけん。劇齋はその詰朝。己の比及は起出で。遠く激と鬘り
 柳の齒を入ま。ひより便室の縁頬は蒲席を布走。宿ろから珍し
 庭の松と眺めつ。どつどもうら仰け。承塵は一囊の薬。菌磨あり。揚枝を貫
 ぎ。板隙は挿さ。二訝と身と起。て竊は取て。こゝろは。朝毎は用する
 ち。薬砂の尋くも。あふ。囊口の唾は汚。揚枝の房は表乾。と。裡は。母湿
 氣あり。かれば。こゝろは。入あり。て。その。ま。で。の。揚。枝。を。用。ひ。り。疑。へ。ば。か。ん。ど。べ。て
 齒と深。さ。女子か。この齒磨。を用ん。や。縦揚枝。を用。え。も。その。房。は。男女。乃
 差あり。こゝろ。揚枝。して。紅も。漆。は。鉄。漿。も。汚。と。む。原。来。は。旅。行。せ

間隙は大膽不敵の癖者あり。こゝ夜に臥し日と累ねど誰う亦こを送らん。
 曩も都と起しと死早藏の故郷へ遣つ。密入る將て適つ。苗守小僕僮のあり
 尸こそあつては後安けしと思惟へん。只前門は虎を禦して。後門より狼の
 入るべき所知らざらん。鄙語の守隊の隙にあらん。偷見の隙をこゝのりならん。
 よや人を欺くも人又欺る。男子はあつて。今暴女は。奸夫を穿鑿せし暗さ
 恥を明くする。これ亦這奴を欺き。さひの隨に罰をあたへ何ぞもこの熱腸を
 冷ん。噫嘻娟。腹たし。いふとべ。と手と又て。疾視逼る。怒の面色焼く。如
 胸の火の燄とあつて。吻く息を推鎮め。此も騒が。又其揚枝齒磨を舊乃
 承塵は狭き。膝と抱き。さう氣あ。再び庭を眺て。浩處は阿磔。既

起出る。主人は茶を勸んとく。手つと。一碗汲りて。未だ劇齋をこを右は
 受て立んとするを呼ぶ。自然頃。日苗守の宿に起臥せし人ありや。と問れて。
 幾とりと出る。秋の色成顔の温熱と。んせと。莞尔と。うら咲く。こゝのひくけも
 るた女子むらうの苗守を。鄰人むら。憚けん。言訪して。稀多。誰来て起臥
 去はらんや。といせも。あへど冷笑ひ。仇ある野鷄の北恋。頭隠せと尾を隠さん。彼を
 見よ。男子の揚枝齒磨あり。彼のい。と指せ。阿磔のい。うら騒ぐ。胸を鎮め
 かりやう。偽二郎。ぬの物とて。送る。あつと。かひ。小帰宅の報。慌と。わの
 揚枝齒磨を。彼人むら。忘れ。吾侪中心つ。疑を。悔い。れ。遮莫いひ
 と。脱免の。状と。尋思。つ。うら。啗。うら。笑ひ。彼二種の。うら。

疑ひのみのま侍もど。曩おん牙が筑紫へとて首途の日の夕れ。さらせ
 妾が掃へり。常の頭よかきると。匙がよく認りけり。その旦藏が齒磨
 り。といへばそが俵掃も遣はせど。いふもまを紛まよけん。然るべそを
 取わがと。旦藏が還る日。ひさせと。常をどめて。匙は取せけり。死
 原末その折承塵の板隙へ狭し。いひ黒ま。頭をうら掉り。ま
 り。るもあやむめと。匙が身長で彼外や。いふ。手の手へ。死を
 かりとも及びか。けん。取れば。立取て。見よ。と詰らして。も。屈せ。その折
 縁頬。踏継の櫓。疑。い。匙を召ん。問せ。と。陳。れ。劇。齋。呵。と。冷
 笑ひ。口さ。う。げ。い。ひ。と。け。と。も。匙。ま。向。ふ。も。あ。は。ば。旦。藏。が。物。と。知。つ。つ。子。

局へり。か。く。て。便室の縁頬。置の。る。身。長。も。届。ぬ。承。塵。の。板。隙。へ。踏
 継。と。て。拂。り。あ。ん。や。よ。ん。あ。る。ま。れ。理。と。る。れ。も。猶。あ。つ。と。せ。ん。あ。も。せ。よ。
 揚枝の房へ表乾。き。り。裡。ま。る。月。湿。氣。あり。その。み。ま。朝。毎。は。用。は。ん。
 あり。ん。や。論。より。證。執。よ。く。ん。と。遠。く。身。を。起。して。件。の。揚。枝。を。抜
 ころ。つ。眼。前。へ。突。つ。く。紙。ん。か。つ。も。せ。と。酸。鼻。と。揚。枝。の。房。の。湿。り。の
 い。ぬ。日。の。雨。風。は。湿。吹。の。か。ま。る。餘。波。も。ん。ぬ。ま。ぬ。妾。と。責。ん。より。匙。は
 問。な。り。と。そ。や。り。秋。三。月。言。訪。ふ。人。も。ぬ。宿。を。り。苦。し。雨。の。夜。も。風。乃
 便。を。待。不。樂。て。寝。れ。ぬ。隨。は。る。う。う。く。い。と。恋。く。慕。く。僕。つ。又。僕。へ。て。数。む
 日。と。共。指。は。癖。は。く。と。物。を。あ。り。か。て。還。る。も。て。只。一。夜。慰。め。を。碓。乃。鳥。と。

人の説教理るるを校立て疑ふ心をも枉津日の崇欽と怨言
 つ泣く折る人の来る音とけは阿磔の顔は両袖を推當て衝と立ち
 次の間へ退く程は劇齋誰とんかとは是則蜜へはけり近く跪居六
 波羅殿より使来ると徴状ありとさ出せば劇齋貌を改めて恭く
 受取つ披見てうら點頭現こまの徴状ありは此度の恩賞と行まんとて
 ありと徒者の準備せよ汝外は西三人速に備へり。そくといそがし
 承書と字イぶぐもこまを使ひ速とてその人かた考と女を早飯といそ
 げて衣裳を脱更るま程は備人木の来はけは蜜へとも併將て六波羅
 へを赴けるがれば阿磔への朝辛く龍潭と渡り心地へまればな月安

かぬ胸は岐道ゆくと乾と。その偽の袖の両を斂めてあそと出遣つ初て
 吻と息とれば匙も亦その折は次の間ある。あその臥簞を疊納めりけは侍の
 趣を竊聞て共胸をも冷る。今又笛守の時を過て此彼顔をつれ合いと危き
 六波羅のん使まよくと脱はひ一放り限あけまど又この後へはあれべき再び
 あまぐ問とやせん用意をまらふびんものなびのむらうりかべあまをさしと
 舌を挿へて其け阿磔へまづく領とそそるは頼むのこころは問
 らとも曩は吾儕かいつく如く口をあててのひ種を代りなつて些の擬議
 せどそへは安かへ苛を呵責はあへばとてまづ情を被まをふし慮と
 仇た見。まど今も早藏が立かつて問とる。彼揚枝齒磨の口がのあら

心地あり。免をさへ實を告ぐ。且その刃を退けぬ。と声の只枯野の虫の霜よ
吻くむらり。劇齋へこそ。と又左手は取直して。そが俵は引起し。匙を
面の黒やあるも。忽地は青くあつ。涙は白粉剥く。青黒は濃と薄あり。粉
桶は陥る。溷鼠は異る。咬あぐて。ややくは湯を飲め。有敷命のいと
惜ま。阿磔がりの一五十七月十日の慾参ま。くは蓮華院まで。偽二郎が
単衣を引破。緋の首より。一昨日帰寧の報あり。ふより。偽二郎へ慌しく。
蓮華院へか。去り。尾を迷る。其報く。劇齋聞て。又と納め。とあふん。
さあへ。初の艶簡へ燻う。と別は又偽二郎が。阿磔は贈り物へは。たと
問とて。要時沈吟。彼人こそ。在。程物贈られる。は。別は。臨て。何やん。

書つけ。遮とされ。護身囊は納め。ひきとも外あから。よるの。情
由へ。あふ。ど。は。う。といへ。劇齋領ま。と。あふ。ん。さ。あ。へ。阿磔ハ
今浴盤に入。ぬ。是。究竟の折。こそ。汝。竊は。彼。外。の。ゆ。て。護身囊を
りて。来て。見。せ。よ。と。う。と。い。の。そ。が。一。立。る。よ。匙。ハ。今。さ。推。辞。は。由。あり。阿磔が。脱
る。衣。と。共。衣。桁。は。掛。護身囊を。竊。取。て。来。よ。け。と。劇齋。み。を。や。く
初。解。披。き。て。此。汝。彼。汝。と。う。程。よ。果。して。詩。歌。を。書。く。物。あり。為。人。と。落。款。して。
紫。金。の。山。鶏。の。片。靴。を。包。添。う。と。こ。と。汝。と。問。べ。然。と。答。ふ。劇齋。ま。く。黙。讀
して。舊。の。ど。く。囊。は。納。め。ま。を。阿磔。は。知。さ。ぬ。舊。外。へ。掛。て。措。る。要。あり。と。
又。来。と。と。其。け。は。病。を。浴。室。の。か。へ。赴。け。又。か。へ。来。て。跪。坐。す。彼。一。種。仰。る

浩如かこうは蜜八みつやちハ六波羅ろくはらよりかへり来つ。ついで暗くらと喚こゑと劇齋げっさいの聲こゑあり
 立日たてひの暮くれるふるふとて斯灯すかぢを掲かげんと呼よび阿禪あぜんハいそく衣ぎを被かけ蜜八みつやちが
 焼やく。行燈あんどんと奥おくより居ゐて匙しよくと發聲はつせう呼よべども絶たて忘わすれ渠みちへハ
 登のぼりけん淨手じやうてより久ひさに癖くせあはれ吾侪われらが背せの垢あかも流ながれ日ひの暮くれるもあはれむ
 や。とひとごころも出て来こねば主人しゆじんの穢けがれと損こげと。蜜八みつやちは柴しば折お焼やく。夜
 食たの膳ぜんを果はても匙しはる舟ふね影かげもせど。ひかひつ便室べんしつよりめけて云いふと告つるよ
 るん劇齋げっさいは冷ひや笑わらひ這奴こゝろ生なまごころつたれば。旅行りょぎんの留守るせうの程ほどより密夫みつと
 るごよあひ初はめて動うごれハ曠あふ昏くれハ小路せうじゆ隠かくれとるやわらん。あづうのて来るも。
 うら捨て懲ちがりハ外とを索もとめとる。といふまを阿禪あぜんハこも亦またふるう。やあわらけ

飲のと哀あはれハいふ安やすむぬ胸むね苦くまよ再びまたいひむ。さうくる程ほどは夜よハ二更にげよりるよ
 けは劇齋げっさいハ阿禪あぜんを召よび匙しが今いまも出て来こぬ。か推量おしりやうは違ちがふとる。密
 夫みつとは誘よびて逐電しゆでんせり。めあべ。され今宵こんしやうハ更げ闌らんと。翌あしたハ早はや旦たん蜜八みつやちを。
 異杜いと許もと遣つかして信まことと穿鑿せんさくとべし。門かどの鎖かぎとよくさる。といふ言ことの葉はは積たるは。
 瘡かさも足あしの落おつる。阿禪あぜんハ通骨とうこつ物ものとあひぬ。かくてその詰旦つげたん蜜八みつやちハ主人しゆじんの意いを
 びて。杣木さやま挽坊まひやうへ赴まり。異杜いとは匙しが告つて。尚なほさる。とやとる。と問とハ異杜いとを
 うら駭おどす。渠みちのふてあよ末すえさん。その安やすかぬ。みこそ。といふ。いふ。うらむ
 措おとど。馳はりて異杜いとといふ。富小路とみせうぢハ將まさて来こよけり。當下たうげ劇齋げっさいハ異杜いとと奥おく
 召よび入いて匙しが。いふ。と説とく。と又一遍またさる。いふ。這奴こゝろハ年としいと少すくけれが。

入るるに於て役立立移り月来阿磔が心長閑く使ひする人々を知らず然るを
 心得足らざるに於て欲主も隷も親も附も女子は似げなく逐電せしる良ぬ
 情由のあつてやハそのまればかかぬ國々六國の法度あり家々家の則あり
 そを憎むと云ふはねどもそを忽ちあふぬるにけりし三日の間は往方と云て
 將て来よる等閑にせむ婆も罪ありそのまびに決して許さず公廳沙汰さる
 とら後悔と云ふ威一つ懲一つ敦圍暴くた示せば異杜の心理ふこそ只か
 慈悲と云ふる小諾て宿所へ退りたりこの時阿磔の胸をさす奥へ避く
 異杜は遣むらうと云ふ危き人々を憐む暇を慙は渠を慰め疑ふんと云ふ
 るかくてその日あつて久し異杜の名草の宿所は来て匙が往方を彼此と隈

めく涉獵はれども今ふその便宜をゆとる母このうへはかん慈悲りて又四五日と
 いひ延る劇齋へ出てもあつて約束の日を過しては許さざるなるに阿磔が
 由縁のめめれば渠は顧て五日緩人信と索て將て来よと蜜八はいへども異杜は
 軀てかへり去つてその日はあつて又五日或ハ七日といひ延て来る日もあつて願事
 歩を運びく日を送るぬ是より先は劇齋へ匙が俄頃よをばありてハ厨の
 夏は便りとして坊後の裏屋の老夫婦と傭ひつ日毎に夏使たり阿磔が
 私情と防ん為るるにこの老夫婦は早より暮るまで薪水の夏を掌りて
 夜多く宿所へ退るるに蜜八は隙のあつて再び阿磔は口説と云ふと云へども
 彼傭人未だ恋の関を居らして終よその便をゆとるあつて焦る心へ阿磔へ

又偽二郎まごころの夜よのそらへども既すでに是こゝがどゞばあつてハハ音ね耗をさぐもあつた。
 彼女子かのむすめハこの月つき来きた密ひそ夫かみあつたりのあつた。仇あやの恋こゝろをせうろの豫あきて
 よりこれよく知しる。然しかる小こ故こあり逐ち電でんセハ彼揚あき枝えの再またび起おこて手て寄より
 呵あ責せまのひもせが共ともに罪つとを脱え下くだとどひおそれて逃あ隠かくと下くださうとそ
 何い處どこも身みを寄よせへる。親おやの家いへの末すえとどハ少女せうにょを病やまの坐まは逼せまりく。
 淵ふち川がはへ身みを投なめけん。まかさんあいのいさう。痛いたしめるよとと想像おぼえら
 どよかく小こ憂うれとまの穂ほの繁あは芒ま招まくともわり日ひを送おくるは劇げ齋さいハ竟つひイ
 復また彼揚あき枝えのそら回まわむ。夜よの衆しゆ由よし隔へり。初はつは変かる氣き色いろあつたハ阿あ禪ぜんハ
 僅わずかは胸むねもちつれて原もと来きた彼齒は磨ま揚あき枝えを一旦いつたんハ訝いと詰つ問ととのそふと。

終つひに欺あざさゆたりとちの心の浅あはを小この丹に疑ぎひを釋とくと媚こゝろて
 枕まくらを進すすまハ劇げ齋さいハのそらうて。あの老おきな孤ひとり虚うそ々々とこれ汝おまえは欺あざまんや。
 これこそ汝おまえを欺あざさゆれ釣つり買かをさうや。とこの中うちはあつた隠かくて又またを
 研けんみふ。とくくする程ほどは秋あき暮くれて初はつ冬ふゆの上うへ幹みはあつたね有あり一日いちにち劇げ齋さいハ蜜みつ入いれお
 彼此たがひある。病い架かへ赴おもむきかへるは蓮れん華げん院いんへ立たりて齋さいセ捨す物ぶつを方かた丈ぢへ寄よ進すす
 へ。前まへ月つき歸かへ京きやうのよう妖あや告ことへ住すま持ぢハ對たい面めんして茶ちやをさめ。その恙やまあるを祝いわいで且かつく
 道みち俗ぞくの難がた談だんと當あた下くだ劇げ齋さいハのそら。某その前まへ般ぱん六りく波は羅ら殿てんの仰おほを稟まをす。西せい國こくは
 走は下くだり探たん頭とうは湯ゆ劑ざいを進すすせ小こ十じゅう死し一いつ生せいあるおん病い著しやく日ひあつた瘡かさりのあつた。
 おん欺あざび甚ししく厚こう禄ろくをのそらと頻あり仰おほせ。某そのる何なん大だい望ぼうあつた。

西藩の醫官たゞんる。夙願へど推く辞し。まうせ。惜せのふり。大々
 む。汝が身子ごとくも。まわせよ。身子よその人多く。親類まれ
 縁者やん。醫師も。も厭ふと。汝が薦るのの。ハ俸禄形。のぞく
 宛行ん。汝より。て再生。る。志よ。こ。あ。ま。や。も。推。辞。や。と。宣
 する。その。辱。さ。其。が。身子。よ。おん。役。立。べ。さ。の。あ。一。人。も。い。は。ど。親。族。縁
 者。の。子。身。を。擇。て。や。上。べ。ゆ。と。承。り。て。退。り。然。れ。も。知。る。ぞ。く。
 都。の。縁。者。も。み。舊。里。の。親。族。あ。れ。も。皆。是。田。夫。野。人。の。ぞ。筑。紫。の
 探。題。の。近。臣。は。薦。む。べ。さ。の。一。條。の。田。果。も。聖。僧。は。對。し。な。り。か。る
 俗。談。を。つ。ま。の。ハ。鴻。許。の。所。行。る。べ。し。と。も。諸。檀。方。の。中。あ。ら。は。心。あ。そ。へ。ハ。



どや。その人か。ま。稱。ひ。る。某。が。親。族。も。と。て。探。題。家。へ。薦。お。う。え。ん。は。は。べ。さ
 人。の。い。ど。や。と。問。ふ。底。意。は。と。深。き。伎。倆。あ。つ。と。の。ぞ。知。る。べ。し。住。持。の。使。て。沈。吟。し。
 檀。越。の。ま。げ。し。も。目。今。誰。と。あ。ら。は。り。但。し。寺。小。寄。宿。せ。草。樂。偽。二。郎。と。い
 武士。の。浪。人。あり。渠。の。浪花。の。人。氏。も。七。の。手。迹。甚。佳。妙。且。学。問。も。些。あ。つ。と。和
 漢。の。故。實。と。記。憶。し。る。人。か。賤。か。凡。年。の。三。十。は。足。る。べ。し。男。態。風。流
 た。と。い。と。少。く。え。り。か。この。人。は。寄。宿。の。よ。り。寺。の。一。切。經。一。部。い。と。盡
 蝕。し。る。を。繕。写。せ。や。と。あ。ら。は。法。師。も。能。書。稀。と。う。て。今。茲。四。月。の。比。より。
 彼。偽。二。郎。を。傭。ひ。つ。繕。写。の。よ。り。を。委。任。せ。し。浪花。の。乾。親。病。著。あ。つ。と。て。七。月。の
 中。旬。より。猛。は。彼。地。へ。赴。き。つ。い。ぬ。る。月。の。十三。日。再。び。寺。へ。来。り。ま。る。あ。れ。も。貧。道。は。

渠が人となり大志を遂げんとすべし。及引をさす。其の及引は且試を告るの旨
かんと思ひぬ。對面して商量をせむ。ものづら分明なる。この外其の人を
正首と示せば。劇齋は愕然とて笑ふ。その究竟の事。願ふその草案
生とせん。對面を許さるべく。時宜しうて立地は緯の整ふと。やわん。面識
あるこそ。といふは住持の款びつ。その易きと。応て掌をうち。鳴り。一個の行童を
召よして。云々と命じれば。うは果て退きけり。當下劇齋は腹裏より。や
これ偽二郎が姦とまよども。いふその人ぞ。いふ。彼奴を認め。謀その
圖は當まる。且彼奴が乾親の病著を。看とる。ごひひ。下らへ浪花へ赴く。初
秋の中浣より。ぬ。九月十三日。ま。家へ潜居る。事實此彼都合。甚麼

ある面ぞ。よく見ると。とある氣色を推隠し。扇の要走して。今うくと俟よ。
偽二郎のひかひ。住持の賓客より。接とて。召よ。この訝しげども。推辞
べも。あつ。その袴を引穿て。客壇へ。来よ。住持の間近く。招よ。
今劇齋のひかひ。辞み。説示して。叔劇齋より。對ひて。この人則
偽二郎と。引あ。劇齋の席を譲り。名字を。通して。他るもの。なげ。イ
款待し。某云云の一議あり。遠方にも。厭ふ。官途は。進んと。思ひぬ。
筑紫の探題家へ。吹奉。緋一朝。決。再。その意を
ひく。と。真。相譚けり。偽二郎の。未客を。誰。と。思ひぬ。
その名を。顔色の。変る。胸の。頻。うら。騷。推。つ。

笑くよ俗よい甘れ相談がれハ阿磔と情由あるん知れん其あふまへに
 然と心と緩さんやとかいハ右繫よろちの解むや果て頭を擡薄命浮浪の
 某と大諸侯へ薦んと思食つれん寔はさるる幸ひもあらん人もある
 支度ハ自力ハ整と浪花ある親族より相譚て後よことおん答とつるあ
 好意謝するあつるあつるいと致しくゆとのハ劇齋微笑て現然あつるあ
 ろん輕諾ハ信寡一當座は承引ぬねハ下海望くあつるも再て談ぶる毎
 上人を勞しするべしあつるあつるハ休息好ハいどやと問とて偽二郎慝む
 よもこの方丈の西は當りて籬笆の中る矮屋ハ是某が臥房あれども
 搥中拂ハぬ挾席は未臨ハ恥るは堪とる倘又所要するまらハ庫裏とる

召しあつる頃日ハ日の短くて書写ハ暇の惜けとる母後の見糸は承る
 べくと回答て更は致びと住持は述て退きけり劇齋こまを目送りつ
 陽又得意の面色してその人柄と譽しつ住持も亦致びていハ甲斐ありと
 あひりかくて劇齋ハ方丈と辭し去りて本堂のわらうまつる母あつる
 あれハ蜜ハと見かへりて云々と分付とハ蜜ハのころを浴て遽しく立ちあ
 偽二郎が子舎は赴くは恰好偽二郎ハ袴と脱て壁は掛劇齋はいつ介
 るぬとさぬかうさまと折外面は呼門のあり誰そと志て障子と開
 且ハ蜜ハ恥て縁頬のわらうまで進み入て偽二郎より対ハ僕ハけ
 初て見糸は入る。名草劇齋は従者あり主人記臆のまらかたよ。

倉卒の間かしては苗字を忘さしり。無礼なれども問て来よといひつけ
 られて来りぬ。いへ偽二郎領とて。其の草樂氏之草のこを樂のたの
 しむ。草樂偽二郎ではと報を蜜八より聞て。僕も亦記憶す。況文字の
 訓讀をいふ一切さういふのど。願ふに筆紙の端へ書つけてあひ存と
 代りあてをせり。是も亦推辞べきにあはれ。机よりひ毫を洗く。姓
 名を字しり。こまめなればと。遮よまらん。蜜八の間の縁頼は尻をうけて。
 室の四隅を究めり。名簿を受けてくら載す。そが依去より。劇齋の蜜八が
 かつ来るをさう程。要時こそあつけし。いつかを致途中に立在は堪ざれば。
 寺門のわらうは赴きて。さんねば左辺は門番屋あり。この寺の門番は鼻鉄

額は古瘡あれば人と入んぬ。面影の刺瘡毒を患る者。頤の膏藥より。
 衣領は流る膿水へ。今も臭け。香脱の玉間。桶は葎草を野排。窓は草鞋
 草履をどい。いづともあ。楯出せ。いづと造りて賣けり。劇齋ははくくとん
 出してあやう。この門番ある。道人の癖あ。さ面つた。手押置。後々も用る。工の
 あるらばや。と忽地は尋思し。うらう近く立りて。門番より対ひ。其の徒者を
 俟め。平介あ。この端を些賃め。と羽織を褰て。楯は尻をか。けんとま。れ。道人
 を名く見か。つと。然るべきの。とあひけん。そのいと易なる。と。衣裳の汚はらん。
 塵うた拂。あ。とあ。と。と。いひ。由。詠。ら。ぶ。身。を。起。し。て。葎。葉。帯。り。と。掃。清。め。
 の。い。と。あ。へ。と。請。と。れ。ば。劇。齋。大。は。疑。ひ。と。その。名。を。向。の。薬。中。と。答。ふ。その。と。死

劇齋ハ掛る草履を見廻して。この紙緒の薄草履ハいづれも和主の細工
あるべし。いとつよげよえめれば。已由一雙買らて。持草履よとゞまどりのれて
四五雙そろおぬ。既ハ齋とるどく。某が造まる草履ハ蒙を打と大さ
あふぬ。第一足袋を損せん。端緒ハ真苧を用とべし。強く人み舁
いへ。ゆえんゆへとさよる。を取て傷よく折る。蜜ハかア末よけとバ劇齋ハ
目注して偽二郎が返辞といへせ。この草履のつよげあれば。目今一雙買らたり。
こまゆら漆とと遞とつ。懐と搔探て。又薬中より対ひけハ中途のりるおはよ。
鳥目と忘まてり。せびと納めと。いひ被て。一方銀を取まれば。薬中ハ呆果て
受らる。ちよ取納め。こまゆひひもあ。只一雙の草履の價よ。この金受て。よろ

らんや。他日余諸君の日は。賜るも厭ふ。とハあれハ決して受ら。と推辞ハ劇齋
頭とち掉。この草履ハ限る。あふぬ。の徒者ハ。腹心蜜八といふの
あり。とちく来て草履を買せん。姓名と今告と。も渠と。まよと。怒るハ。
後ハのづらあるべし。と名退ると立わ。ぬ。薬中より。飲びて。蜜八よ。とら
追従の蒙打植で掃く庭。腰折屈めて送るけり。その中ハ蜜八ハ。年未
客と。主よ似げ。今一方銀。草履一雙を買ら。緯のころと。ゆるり
く。舌と吐。呆惑。い。と。主の後方。従。て。既。一町
許。劇齋。と。と。偽二郎。が。の。と。と。向。ハ。蜜八。遠。一。書。せ
名簿と懐。と。と。出。と。と。且。その。子。舎。の。為。体。と。巨。細。よ。告。る。ふ。あ。ん

劇齋げんさいこまをほら勞らうふく披ひらきとこの名簿なぼをまわる。曩なほは阿磔あはせが護身まもり囊ふくろ。秘ひめちをぬす見みし。詩歌あひうとご同筆どうひつあり。彼詩歌かのあひうは落款らくかんして為人たみと字あざなせしむ。偽いつはり二郎にらうの偽いつはりと隠かくせし既すでは阿磔あはせが女奴にんぬ夫よとへる。子舎こやの案内あんないさし知りつ且かつ此こ彼のかれの證せうこ拠よをえひて彼奴かのやつが足あしを禁こるを采利さいりとりて奴やつがふ囊ふくろの物ものを取とるより易やすし。遠とほくは手てをくだしとべと腹裏はらはのこ。この時ときは蜜みつハもいちも意中うちの機密きみつを告つぐは只ただ偽いつはり二郎にらうに對面たいめんせし一條いっぴやうののめさし聊多ちやうよりあんば蓮華れんげ院いん詣まじのとを阿磔あはせもし知しせしと且かつ示ししてさう氣ある。その曛昏あくれは宿所あぐらかつつ。又また四五日よひをふ經わたる程ほど霰あられがあの甲夜よひの雲くも隠かくれ吹齊ふきていと寒さむき夜よありしは彼傭人かのやとひ夫婦ふうふののい生平せいよりなまくかつり去り。蜜みつハの厨戸くちど棚たなある酒さけを

盗ぬすをえひ酔臥よひし。劇齋げんさいハ阿磔あはせと共ともに臥房ふしどに暗火あんかさし入いれし。夏中なつなかの比ひまでいよもと睡ねらむ。夜よの更みくる隨寒まかる。鶏卵たまご酒さけしてあままんど火をおこしる。うとととといとととと阿磔あはせハ火鉢ひばちに續つぐ炭すすを半起なかして紙燭しやくしてたたて厨くちやにありし物もの大おほかしととり揃て烟鍋かまどをうけ鶏卵たまごをかきその酒さけ既すでは熟まじる。小枚子こまがねを忘わすれてふ再び厨へかきけり。その間まは劇齋げんさいハいとろ竊ぬすは準備じゆんびせし。蒙汗まうあせ薬くすりをとり出して鍋中かまどにいれてける。阿磔あはせハいとろあれとある。べととととと厨くちやより小枚子こまがねをとり出してて来てたたて蓋ふたは鶏卵たまご酒さけをついつ。やう劇齋げんさいハままま劇齋げんさいハその蓋ふたを手取とりて膝打ひざうち鳴なり噫忘わすれる。そのそのあれ聖せいハ祖父そふの亡日なむしありしこの酒さけを喫つ。そままいとろ喝しる。

生酒も欲得と名へども更刺されば着る。臥てをよま酒氣あふむ。口が身も
 共よわすまらんぞく喫ぬ。とこよせしう。阿磔のこまを実直とて。理あれば
 由も浮むその蓋を受つて吹冷しつ喫む。又一蓋と勧めしむ。
 うらかさねしうけしども。鍋ある酒の半も盡む。獨酌の奥あはれ。さまで
 こそ物と片よせ。そがわよ火を埋め。共よ睡は就んとするよ。立足取次は得由
 堪む。忽地は仰反倒て眼を睜り。手足を張て流る涎の糸の如く。劇齋と
 こそと。快愉よんかへつて。裳を褰て頭を踏著。畜生今こそむひまらめ。
 留守は姦夫を引入きて。飽ちてんを欺んと計り。この愚さよ偽二郎と
 推あふて。殺さるの後々まで外聞を名へて。汝とまう結果て後彼奴を

殺とべ。細く流わり。落成とんよ。潜す小罵責て肌は著る。護符囊を
 奪つて項は樞密と縁類ある遣戸を外して。阿磔を肩より被て。徐々
 庭は出まども。阿磔の既よ蒙汗薬の毒氣よよつて。死せるか如く。後呼吸の
 かよふの劇齋へそは倭は庭る。車井は立ちうて。阿磔をやを。扛揚つ。真倒よ
 投落せ。幹は撲ま。水は濁して。忽地は死てけり。かて又劇齋を井の辺に庭
 下駄と脱さる如く。並居て竊は臥房に立かつる。鶏卵酒を流し捨て。鍋蓋を舊の
 ぞく。戸棚へ納めざる程よ。丑三の鐘音とて。弟子局の蜜八が。隼声のよ高
 ければ。造化高妙とひさう笑して。臥房の燈火吹滅しつ。横引被て臥しけり。噫
 劇齋が。残忍なる憎む。懼るべし。最根深き伎倆なるも。阿磔も亦始終罪



因果観面
一妾
先溺死と

阿彌



青磁石文卷四

齋

八

雇人

雇人

九七

あり。今その怪丈夫の手ふ死せし。自業自得とらふに死の。物の美あつて毒
 あり。その害豈少くもんや。野花禽獸皆去り。添削坐す。至て管を擲て悵然
 たり。編中孝子義士郎婦の掃あるといふ。せん再説その詰且傭人かへんや
 来つ。蜜八もどき起つ。便室の遣戸を開く音。劇齋の驚覺て起出んとする程。傭
 人の井幹より水を庖福汲入る。長き黒髪罐をかいて。女子の死骸浮きけり。
 こいつを驚叫びて。蜜八は告わす。報且主従慌忙つ。齊一度へ走出て熟
 視と。阿磔の劇齋の慷慨げ。脱する下駄と。とんからん。その下駄のこまめれ。ハ
 謬と。落るる。夜飲り酔臥る。果が臥房を脱出。今朝ももあつ
 きたり。野狐は呼出され。狂乱せり。の致こいつふ。と蹉跎して陽哭

とれ。蜜八も。ひとかけて。本意遂ぬ阿磔が横死と。惜して。竊は涙と流し
 けり。さてある。劇齋の云と。四鄰ふ告て。人を聚合使を。和木挽坊へ遣
 一。異杜は阿磔が横死を告て。と。来よとの。異杜は。驚く物から。
 匙が二議の。果ねハ影護く。多ひけん病は。假托て。遂に。来ど。かれハ。侯と。由甲斐
 み。とて。水。を。ぬ。る。め。阿磔が。死骸を。引揚。さ。一。宵。井中。浸。れ。
 花の。顔。色。変。り。て。腹。う。よ。ふ。半。足。も。太。ま。り。珊瑚。折。摧。て。水。の。や。寒。い。お。ね
 痛。ま。り。と。人。を。嗟。嘆。ま。う。け。素。より。横。死。の。う。め。ん。劇。齋。ハ。亦。蜜。八。と。連。率
 院へ。走。り。て。由。と。告。法。師。を。招。き。緋。な。祇。律。は。徒。へ。骸。を。棺。に。斂。る。是。由。阿。磔。が
 愛。せ。り。の。之。彼。由。送。愛。の。物。と。て。衣。裳。調。度。櫛。笄。を。棺。に。納。り。物。々。々。

さて次の日は葬式にて棺を擡出さる小よろづ本妻のどくふ志とれ彼此の
 人陸續して寺まで送るも又かりけり。抑齋が肚裏も月いろある伎倆の
 らん量知るりの絶てり。かくてその日の下晡は葬の果て蜜八のかり来つ。
 傭人ホへ辞去て傍人のあくるけは劇齋の蜜八を奥より召と。
 閑談時を移つ。沙金四五両遞よる蜜八こととらつ。一たび
 駭死てるども嘆息。又下とびの怒と含めて眼を睜り腕を振り仰るる
 いひぬ首尾よく為課せゆのと応て金を受納めその骨圍は只ひとり。何れ
 ともあく出去けり。

刀筆青砥石文鳥水箴語卷之四終

